

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 奥 健夫

仏像を中心とする日本彫刻史研究は、様式史を主軸として進展してきたが、その蓄積を踏まえた上で本論文は、仏像がいかなる意味を持って造られ、社会の中で受容されてきたかという問題に考察の重点を置く。全3章を貫く中心的な概念として仏像の〈生身性〉があり、仏像が生きた仏であるかのようにふるまったことを物語るテキストと、仏像を生身の人間のように表す手法とが総合的に論じられる。第1章では、前者について経典や『日本霊異記』のような説話集が示され、後者については右手が異様に長く造られる法華寺十一面観音立像や、足の指が歩み出すかのような形に表され、瞳に異なる材質を嵌め込んで光る素材とし、あるいは口の中に歯や舌を表すなどした多数の仏像について、説得力のある分析がなされる。五臓六腑を像内に納入した北宋の清凉寺釈迦如来立像は、生身性という意味でも日本彫刻史に重要な意義を持つ請来品であったことが明らかにされる。

生身仏、すなわち現世に具体的な存在を表した仏への信仰が院政期に盛んになり、鎌倉彫刻の成立に関与したことを論じる第2章が、本論文の中核を成す。生身信仰の高まりとともに像に生身性を付与する種々の手法が取られたことが具体的に示され、鎌倉彫刻の写実性と一般的にいわれる特徴をより深いレベルで了解させる内容となっている。裸形着装像、如来の髪型を螺髪でなく波状に表す作例、仏師肥後定慶の様式など、一見周縁的な事象から、仏像はいかなる期待に依って造られるのか、模刻のような既存のイメージの再利用はなぜなされるのか、日本美術は中国美術をいかに受容したかといった本質的な問題に迫る議論は、非常に刺激的であり、従来の彫刻史研究から大きく前進した成果を挙げたと評価できる。

第3章には、仏像を造る技法という即物的な事象を、仏像を造る儀礼という信仰と関連づけて解釈した意義深い論考が並ぶ。平安前期の東寺講堂諸尊像についての詳細な議論は、これらの像が観念的に脱活乾漆像になぞらえた技法を選択しているという興味深い結論に至るとともに、奈良時代から平安時代にかけての仏師群の動向などについても示唆深い知見をもたらした。寄木造の成立、如法仏、一日造立仏、鉦彫り、等身仏といった諸問題についても、それぞれを仏像のあり方についての意識の反映としてとらえ、新たな視野を開いている。特に、本来あるべき作法で造るという如法仏の概念を、檀像の盛行から奈良仏師の新様式の理論的根拠にまで想定する議論は斬新である。最後に、3章全体を歴史的に整理する概観が添えられる。

論文全体として、文化財としての仏像の指定・修理に携わった経験を生かし構造・技法・納入品について着実な分析が加えられるとともに、作例と文献資料を広く探索して問題を深く掘り下げている。中国・インドの作例や文献資料にも目を配り、大きな視野の下で仏像を中心とする日本彫刻史を検討している点もすぐれている。審査委員会は異議なく博士(文学)の学位を授与すべきという結論に達した。